

## 「地域の入り口」概念に関する検討

五味壮平（岩手大学）・筒井久美子（早稲田大学）

Keyword： 移住者、関係人口、地域コミュニティ

### 【問題・目的・背景】

大学や専門学校などの高等教育機関が置かれている地方都市には、実家を離れて一人暮らしをする若者が多く存在する。若者たちは、学校生活やアルバイト、日常的な買い物などを通してまちと接することになるが、多くの場合、その接し方は限定的であると言っていいだろう。学校と家との往復の生活に孤独感を感じる学生もいる一方、地域の側にとってみれば、地域の担い手、関係人口になり得る可能性を持つ若者たちとの接点をうまく作れずにいるといってもいいのではないだろうか。

また、全国的に人口減少や高齢化・少子化の進行が続く中、地方での生活や居住に関心を持つ若者が増えていくとされている（小田切, 2014）。国や全国の地方自治体も、都市部から地方への移住定住の促進や、居住していない地域に継続的に関わり続ける「関係人口」（田中, 2020）の増加を目指して、さまざまな施策を展開してきた。こうした移住者や関係人口にとって、地域の人々と良好な関係を構築することは、最重要課題の一つといっているかもしれない。

他地域から移り住んできた学生たち、移住者、そして訪問やオンラインでの交流を通して関わり続ける関係人口など、いわば「よそ者」が既存住民たちと良好な関係を構築していくための糸口を提供する「入り口」のような場が存在すれば、よそ者の側にとっても、地域側（地域住民側）にとっても意義深いものとなる可能性がある。

一方、こうした場は、もともと地域のなかで生まれ育って来た人々にとっても重要な意味を持ち得るのではないだろうか。都市的なライフスタイルが一般化している中で、普通に生活しているだけでは、地域の多様な人々やコミュニティとふれあう機会は限定され、その地域を深いレベルで理解することや、地域社会の一員であるという意識や誇りをもつことは難しい。

以上の問題意識のもと、本研究においては、「地域の入り口」という場の可能性について検討したい。さしあたって、「地域社会になじみが薄い人々に対して、その地域の多様な人々と出会うきっかけ、およびより広い関係を築いていく可能性を提供する場」を「地域の入り口」と名付け、この概念を洗練させつつ、その可能性を検討す

ることを目的とする。関係人口論の文脈では、指出や田中により「関係案内所」（指出, 2016；田中, 2018）という概念が提唱されている。しかし、「地域の入り口」という概念は、関係人口のみを対象として検討すべきものでもなかろう。

以下ではより一般的に地域の入り口について考えたい

### 【研究方法・研究内容】

まずは「地域の入り口」と呼ばれるのにふさわしいと思われるいくつか事例についてケーススタディを行う。以下では筆者の一人、五味の経験に基づく事例を挙げる。

#### (1) 地域 SNS モリオネット

2000年代前半から地域 SNS と呼ばれる比較的小規模の SNS が全国各地に作られた。総務省が後押ししたこともあって、2006～2008年頃には県単位、市町村単位など、さまざまな地理的範囲を対象とした地域 SNS が開設された。そんな状況の中、岩手県盛岡市が運営主体となって2007年12月に開設、公開された地域 SNS が「モリオネット」である（五味, 深田, 吉田, 2008）。

モリオネットのオープン前から、市民有志数名がこの SNS の積極的な活用を促進するためのチームを立ち上げ、オープン直後からこのチームのメンバーが中心となって友人・知人へ SNS 登録を呼びかけた（モリオネットに登録をするためには、原則的に、既存ユーザから招待されることが必要（＝招待制）であった（和崎, 2009））。

その後主流となったグローバルな SNS とは異なり、地域 SNS では、積極的に SNS ユーザ同士で新たな人間関係、友人関係を形成していくことが推奨された。システムのアーキテクチャ的にも、ユーザ同士がつながりやすい設計がなされていたし、ユーザの規範としてもつながりあうことがかなり重視されていた。さらに地域を基盤にして成立していたため、ユーザの多くは一定の地理的範囲に居住しており、対面的に集って交流することも容易であった。実際、頻繁にイベントが企画され、ユーザ同士はよく顔を合わせるようになった。

モリオネットが出現したことで、それ以前に盛岡市内に存在していた既存のネットワーク（たとえば、青年会議所OB、大学の教員や学生たち、高校の同窓会など）

の間に多様な接点が作られることになった。そして世代や立場を越えた交流が行われた。2011年に生じた東日本大震災の際には、モリオネットのユーザ有志が中心となって、全国の地域 SNS の協力を受ける形で、学用品の物資支援プロジェクト（「学び応援プロジェクト」）が展開され、比較的大規模な協働の実践が行われた（五味、吉田、2019）。その後のグローバルな SNS の浸透と盛岡市役所内に置かれたサーバの老朽化に伴い、2015年にモリオネットは閉鎖された。最終的な登録ユーザ数は約1300人であった。モリオネットで形成されたコミュニティは、交流の場を Facebook に移した。

モリオネットのユーザは、この SNS を通して地域の人々に出会い、自らが関わることのできるコミュニティを発見し、また地域の中で日々生起するさまざまな出来事についてのリアリティをそれまで以上に感じ取れるようになったと言えるだろう。「地域への入り口」として機能していたとあってよいと考えられる。

## (2) 産直はまなす

岩手県陸前高田市は、東日本大震災の際に生じた津波により甚大な被害を被った地域である。中心市街地はほぼ壊滅し、公共施設や事業者の店舗などが失われた。

震災後の陸前高田市内で、いち早く事業所として店舗を開設したのが「産直はまなす」である。この産直は、生産物を販売する場を失った生産者のために、震災の約二か月後にプレハブ店舗で営業を開始し、組合員が中心となって運営を行った。その後の改築や増築をへて、2016年からは農産加工場「はまなす農園キッチンかせる」を敷地内にオープンし、加工と販売を行うようになった。

オープン当初からこの産直運営で中心的な役割を担うスタッフが対話や交流を非常に大切にしており、初見の人でも常連の人でも広く受け入れようとするスタンスを維持していた。また twitter や Facebook を活用して積極的な情報発信を行い、さらには収穫祭やリース作りなど、季節ごとのイベントも頻繁に開催していた。こうした積み重ねにより、産直はまなすは出荷や販売の場としてだけでなく、市内各地で復興に向けて立ち上がり始めた住民や、市外から訪問してくる支援者などが立ち寄る場所となった。立ち寄った人々はしばしば、敷地内のベンチや「キッチンかせる」内の空間で時を過ごすことになり、はまなす従業員やほかの客と交流を行った。常連客がほかの訪問者を受け入れる場面も頻繁に見かけられた。そして、そこに集まる人々の間で対話や情報交換が行われた。こうした対話の中で、復興事業や地域課題につい

での意見交換も活発になされ、市民運動につながることもあった。また地域の風習や文化、歴史がよく話題になり、震災によって大きなダメージを受けた地域について見つめ直す場ともなっていたと言えるだろう。このように産直はまなすは、地域外からの訪問者、地域内の人々双方にとって「地域の入り口」としての機能を発揮してきたと言える。

## (3) りくカフェ

陸前高田市における「地域の入り口」と呼ぶにふさわしい事例をもう一つ取り上げたい。市内で仮設店舗が次々とオープンし始めたのは2011年の終わりごろからであるが、2012年の1月に陸前高田市高田町鳴石地区で「りくカフェ」が誕生した。中心市街地が壊滅的な被害を受け、住民同士が集まれる場所がなくなってしまった状況のなか、地元の医師や女性たちに、震災前からつながりのあった東京大学の小泉秀樹氏をはじめとしたまちづくりの研究者や建築家たちが協力して、「まちのリビングプロジェクト」がたちあがった。そして住友林業などの企業の応援もあり、木造建築の「りくカフェ」が建設された。地域の女性たちのチームが中心になって日々の運営を行った。

りくカフェはオープン当初、飲食店としてではなく、純粋なコミュニティスペースとして運営されていた。カウンターといくつかのテーブル、座卓のある小上がりからなるスペースいっぱいになり人があふれるようにして滞在している場面も珍しくなかった。もともとは地元の住民が集まるためにという目的のために建てられた施設ではあったが、「市内外を結ぶ架け橋の場」（りくカフェ、ウェブサイト）となることも意識され、市外からの訪問者が出会う場、集う場ともなっていた。実際、外部からの訪問者であっても積極的に暖かく受け入れようとする意識が強く感じられる空間であった。いつからかりくカフェの壁面には訪問者たちがサインを残していくようになり、多くのサインが壁面を埋め尽くすようになった（この壁面は後述する本設のりくカフェに移設され、今もサインの数々を見ることができる。）

2014年の10月からは、もとの建物の近くに、大きめの面積をもつ本設の「りくカフェ」が建設された。それ以後は、地域住民の「健康と生きがいづくり」（りくカフェ、ウェブサイト）に貢献するというコンセプトを従前以上に強く打ち出すとともに、カフェとしての本格的な営業を開始、ランチの提供も行うようになった。また健康増進をテーマとした活動も積極的に展開した。カフェとし

ての運営はコロナ禍に大きく影響を受けることになったが、市の事業の一環として単身高齢者のための食事支援などを展開している。2023年現在は、予約制でテイクアウトのランチ提供を週一回行っているほか、市内の他事業者とも協力しながら子育て世帯への食事支援などを行っている。

## 【研究・調査・分析結果】

ここでは、地域の入り口が満たすべき条件について考察を行う。

### (1) 「地域の入り口」が満たすべき条件は何か

#### 1) 機能的条件

「はじめに」では、地域の入り口を「地域社会になじみが薄い人々に対して、その地域の多様な人々と出会うきっかけ、およびより広い関係を築いていく可能性を提供する場」として定義した。この定義をもとに、地域の入り口が保持すべき機能について検討する。

地域内の多様な人々と出会い、関係を築いていくためには、当然ながらまずは「誰か」と出会わなくてはならない。そして、ここでの「出会い」は、一時的・匿名的な関係を越えて、相互に相手を固有名詞（名前）を持つ個人として認知しあう関係が生まれることを意味する。すなわち、地域の入り口はそこに入ってくる人々にとって、しばしば、自分を個人として認知してもらえる場として存在することになる（寺田, 2023）。そして、その場が、特定の個人との出会いの場ではなく、「地域」の入り口であるためには、最初に出会った人だけにとどまらず、地域（ゆかり）の人に連鎖的につながることができる場である必要もある。地域 SNS モリオネットでは、新しく登録されたユーザを、その招待者やコアユーザが既存ユーザに紹介するという慣習が存在していた。また産直はまなす、りくカフェという空間は、その空間が比較的コンパクトであったことも作用し、同じ時間に訪問している他の人たちとの交流が発生しやすい場であった。そこで他の訪問者に紹介されることも少なくなかった。そのため、何度か訪問し、交流を重ねていくにつれて、認知する/される相手が増えていく。そしてそこで交わされる井戸端会議のような会話や対話を通して、訪問者は地域の状況、常識、文化、歴史などを徐々に理解していくことになる。

#### 2) 環境的条件

上記のような機能を発揮するためには、その「場」はどのような条件を満たしている必要があるだろうか。こ

の節ではその環境的な条件について考察する。モリオネットや産直はまなす、りくカフェの共通点より、以下のような条件が重要であることが見えてくる。

- ・地域（ゆかり）の人が集まる
- ・人々をこの場へ導くしくみがある／人がいる
- ・適度に「狭い」ことで、自然とその場の人々の間で交流が生まれやすい
- ・訪問者の受け入れを中心的に担う人（ぬし）がいる
- ・入ってきた人を「固有名詞」として認知・記憶しようとつとめる人がいる
- ・入ってきた人同士を次々とつなげようとする規範がある／人（おせっかい）がいる
- ・交流自体が目的として意識されている
- ・集う人々が時間的な余裕、精神的な余裕を持ってそこに臨んでいる

少なくともこれらの条件が満たされる場合は、「地域の入り口」になり得ると言っていいためであろう。その意味で、これらは十分条件と考えるべきかもしれない。

### (2) どのような場が地域の入り口になり得るか？

モリオネットは、インターネット上の疑似的な空間、産直はまなす、りくカフェは実際の空間であったが、地域の入り口となり得るのは、これらの「空間」だけではないと考えられる。つまり、(1)で考えた環境的な条件を満たすということから考えれば、たとえば、定期的開催されるイベントやプログラムなどの「こと」、特定の個人や団体などの「ひと」、アルバイトや地域おこし協力隊、PTAなどの制度、いわば「しくみ」も、入り口として機能し得るのではないかと考えられる。ただし、これらの場合、それぞれの場を運営する人々や中心となる人々が、地域の入り口としての役割を意識して振る舞うことが前提となるであろう。

## 【考察・今後の展開】

「地域の入り口」という概念について、特に設計との関連で検討すべき要素について簡単に列挙していく。

### (1) 自然発生的な入り口と設計された入り口

本稿で挙げた事例では、いわば自然発生的にできた場である。一方で、「地域の入り口」という概念を洗練・成熟させ、より積極的、意識的に、持続可能な形でそうした場を設計しようとするということにも意味があると考えられる。

### (2) 「地域」の規模

「地域」という言葉には、常にどの範囲を指すか、という問題がついてまわる。地域の入り口を考えるうえで



も、対象とする地域の範囲をどのように設定するかという点は常に意識されなければならない。

### (3) 地域の入り口の運営形態

「入り口」を運営するためには、もちろんマンパワーが必要とされる。「ぬし」のような役割の人々が常駐する場は入り口としての機能を発揮しやすいと思われるが、多くの人々にとって、ボランティア的に常駐する時間的余裕は持ちにくい。その場自体が収益を生み出し、関わる人が対価を獲得できるようにできれば理想的かもしれない（はまなすやりくカフェはそういう側面も持っていた）が、このような場で人件費を確保するのは一般に簡単なことではない。持続可能な場を設計するためにはこの問題をクリアする必要がある。

### (4) 災害と地域の入り口

りくカフェや産直はまなすがそうであったように、大きな災害の被害を受けた地域には入り口ができやすいと言えるかもしれない。一つには、外部支援者が多くやってくるために、そもそもそういう場が必要とされるということがあるだろう。また、こうした空間や場を構築したり、運営したりするための経済的な支援が得られやすいという面もあるだろう。またいったんそれまでの日常をリセットせざるを得なくなった被災者の人々がこうした場に関わる余地が生まれるという側面もあるかもしれない。今後、大きな災害が起きた時には、当該地域における「入り口」の設計を早い段階から積極的・意識的に考えるべきかもしれない。

### (5) 地域外の地域の入り口

地域の入り口は、地域の内部のみに作られるものでは必ずしもないかもしれない。遠方の地域に大学生たちの団体に関わる場合、大学に帰ってきた後、たまり場などでふりかえりの時間を持つことがある。そうした時間は、自己の体験を意味づける重要な機会となり得るが、その際、あらためて当該地域への関心や愛着を深め、さらなる訪問意欲が喚起されるということもあるかもしれない。また、そうした対話を共有した別のメンバーが行ってみたいという思いをもつ可能性もあるだろう。そして実際に訪問した際には、先行して訪問したメンバーが地域の人々へのつなぎ役となる。このような場合、地域の入り口が、地域の外側＝大学のキャンパスのなかに時限的に作られたと言えるのではないかな。

### (6) 地域の入り口の形成主体・運営主体の多様性

大学生が地域活動を行う場合、自分たちでその活動内容をきめて交流の場を作る、ということがよくある。た

例えば東日本大震災後の学生活動として、仮設住宅の集会場でのサロン活動をはじめとして、さまざまな作業が行われたが、こうした作業（「こと」）がやはり結果的に、地域の入り口になっていたというケースは少なくないであろう。この場合、地域の入り口をつくったのは訪問者側である。地域の入り口の形成主体や運営主体はかならずしも地域側の住民に限られるわけではないと言えるだろう。

本稿ではいくつかの事例を検討することから、地域の入り口という概念について検討を行ってきた。そしてこうした場が備えるべき機能的条件、環境的条件を考察するとともに、特に設計の視点から考察すべき論点をリストアップした。当然のことながら、入り口にはさまざまなバリエーションがあり得ると思われ、本稿での検討は十分なものとはいえない。この概念が有用ではないかという問題提起をするのが本稿の趣旨である。

地域の入り口は、そういう名前で呼ばれることがなかったとしても、實際上、これまで各地に多く存在し、機能してきたに違いない。ただし、多くの場合、それらは偶発的あるいは自然発生的に構築されたものであり、その結果しばしばは暫定的・短期的に役割を果たすにとどまってきたといえるのではないだろうか。

今後、より意識的にこうした場を作っていく具体的な実践に取り組む価値もあると考える。

### 【引用・参考文献・サイト】

- ・小田切徳美 (2014) 『農山村は消滅しない』, 岩波書店
- ・五味壮平, 深田和実, 吉田等明 (2008) 「地域 SNS による地域コミュニティ支援の可能性」, 『人工知能学会全国大会論文集』, 105-105
- ・五味壮平, 吉田等明 (2019) 「教員からの呼びかけ：学び応援プロジェクト」『東日本大震災で大学はどう動いたか 2』, pp. 132-135, 古今書院
- ・指出一正 (2016) 『ぼくらは地方で幸せを見つける ソトコト流ローカル再生論』, ポプラ社
- ・田中輝美 (2021) 『関係人口の社会学 人口減少時代の地域再生』, 大阪大学出版会
- ・寺田美里 (2023) 「なぜ彼らは特定の地域に関わり続けるのか」, 『地域活性学会第 15 回研究大会発表予稿集』
- ・りくカフェ ウェブサイト <http://rikucafe.jp/>
- ・和崎宏 (2009) 「日本型地域ネットワークを活用した持続可能な地域 SNS の設計と運用」, 『日本感性工学会論文誌』, Vol. 8, No. 3, pp. 585-594